とうきょう すくわくプログラム活動報告書

幼稚園・学校番号	
施設名（園名等）	ベネッセ雑司が谷保育園

1.　活動のテーマ

＜テーマ＞

色

＜テーマの設定の理由＞

・日常にあふれている「色」を、子どもたちはどのように理解し、感じているか。「色」を通して様々な表現活動を行う中で、色の知識を深め、「色」のつながりから興味関心を広げていく。

２．活動スケジュール

２０２５年７月～９月

3．探究活動の実践

＜活動の内容＞

それぞれが思い描くおばけや衣装、屋敷を作り進めていく。お化け屋敷に必要なものは何かを考え、看板やチケットなども作り、お客さんを招く期待感も膨らんでいった。
自分がイメージするお化けを作るにはどのような方法があるか、怖さを演出するためにはどのような方法や色の工夫ができるかなど、様々な素材や色に触れながら興味関心を深め、思い描くイメージを形にしていった。
作ったあとは、すぐに作品を使って遊ぶもあっという間に壊れてしまうことも多かった。しかし、改良を重ねながら丈夫さも追及していった。
絵本や映像を通し、おばけのイメージが具体化していき、イメージに広がりが見られていった。また、驚かし方もインスピレーションを受け、感触、音、暗さ(色)、スピード感にも工夫とこだわりが見られていき、自分が作って楽しいお化け屋敷作りから「お客さんが喜ぶお化け屋敷」へと変化していった。
５歳児が子ども会議で相談し９月上旬に、年下の友達を招待し、おばけ屋敷の会を開催した。

＜活動中の子供の姿・声、子供同士や教諭との関わり＞

始めに段ボールハウス型の屋敷を作る。思い思いにクレヨンやマジックで色付けしたり、入口に恐怖感を出そうとスズランテープをたくさんつる下げていた。また、屋敷の中も折り紙や画用紙、モールなど様々なもので作ったクモや毛虫、コウモリなどお化けの脇役となる生き物を貼ったりぶら下げたりと怖さの工夫が見られた。暗い黒や血をイメージした赤色を選ぶ姿が多く見られた他、緑とオレンジのモールを組み合わせることで「気持ち悪さ」を表現しようとする様子も見られた。
活動の度に移動させていたおばけハウスは壊れやすく、子どもの興味が途切れそうになる。そこで、遊び(空間)を保障するために、つみきコーナーの一角をお化け屋敷コーナーとして使用していくことを担任間で計画する。

それによって、広い空間で継続的に遊べるようになり、さらに子どもたちの意欲が湧いていった。
また、洋物のおばけや、和の妖怪の絵本などを保育者が用意し、もっとイメージが豊かになっていくよう仕掛けていったところ、本物に近づけようと、素材や色などにもこだわりながら作品作りに没頭していた。

そして、５歳児中心に始まったお化け屋敷作りも、その楽しそうな様子に３・４歳児の制作意欲が増し、協力し合いながら一緒になって作業を楽しんでいった。子どもたちの豊かな発想、探求を引き出していけるように努め、毎日繰り返しおばけ屋敷で遊び続け、子どもたちと一緒に改良していった。
５歳児が子ども会議で相談し、９月にお化け屋敷の会を開くことが決まる。当日は「部屋の電気も消して、暗くしたい」という子どもたちの強い希望があった。子どもが手の届かない壁や窓、天井は保育者も全面協力し、新聞紙や暗幕で覆って暗さ(色)＝怖さを演出した。
お化け屋敷の会は２０分間を予定していたところ、大盛り上がりで４０分もの間、迫真の演技で遊びが続いていった。５歳児一人ひとりの個性(色)が輝ける居場所がそこにあった。

第一弾おばけハウス

夏祭りの神輿を色付けしアレンジを加えてお墓を作る

招待状(チケット)を作り

画用紙、カラーポリ、ストローなど様々な素材を使って衣装作りを楽しむ

自分で組合わせる色を考え、必要な色(ペールオレンジ)を作りあげた。「目が赤い方が怖いから赤くしよう」と塗りつぶす

おばけやしき当日

４．振り返り

＜振り返りによって得た先生の気づき＞

5歳児中心で始まったお化け屋敷作りだったが、その楽しそうな姿に学年を越えて「やりたい」が広がっていった。しかし、３歳児はよく分からず、迷路感覚で徘徊し、トラブルになる場面もあった。５歳児と３歳児とではイメージが異なりイメージの差が見られた。
絵本を用意したことで、５歳児の物づくりは具体化し、そこに手伝う形で異年齢の関わりも広がっていった。
お化け屋敷の経験がない子が多く、５歳児がお化け屋敷の映像を見たことで、演出のイメージをさらに膨らませた。
「お客さんを喜ばせよう」という目標ができ、室内の電気を消して暗くする案も生まれた。
怖さを引き立てる演出として室内や、お化けのなどの色にこだわりが徐々に広がっていったことから、今後も本物に触れる機会を増やしていき、足りないイメージを具体化していくことを大切にしていく。